
勇者ッ！...勇者？

氷見

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

勇者ッ！…勇者？

【Nコード】

N8494T

【作者名】

氷見

【あらすじ】

剣を持ち、放り出される。そんな異世界のはじまり、どう思いますか？

少年『通志』は、そんなことをされながらも生きる少年。勇者は政治の道具、魔王を倒した勇者を召喚した国が一番偉い、だが通志は止まらない。倒した勇者？なら『全員で倒せばどうなるの？』『逆転の発想を企みながら、少年は歩き出す。』

プロローグ（前書き）

うん、この小説実をいうとネギま！のオリ主かこうかななんて馬鹿なことを考えた結果つけたし程度に考えたものなんだ。

でもやることないから書くよ、中二のころだから中二病はいつてると思っけど。

プロローグ

色々、不思議なことがあるものだと思っただ。昔は思っただ。

…空を飛んでいる少年少女

翼の生えた、女の子

極めつけに、森の吸血鬼

たかさんのことが起こっても、純粹だったからこそ乗り越えられたのだらう、そう思う。

10歳にもなってくると、あれ？おかしくね？なんて思ってくるわけだが、今更追及しても無意味といえる。好奇心はある、でも、今の現状を変えようとするほど、その時の俺にはそんな勇氣はなかったわけだ。

だがそれも変わった。

いやもう変わった。
階段から転げ落ちるのではなく、崖からダイブするがごとく変わった。

小学生のころだった

忘れ物をした、それは次の日に宿題として提出するものだった。
まだ未完成で、その提出する授業は一時間め、早く行っても間に合わないかもしれない。
だからこそ教室へと忍びこんだ、クラスメイトたちが言っていたのを覚えていたのだ。

『2 - A教室の窓を上方方向に叩き続ければ、鍵が開く』

そこまで細かいわけじゃなかったが、それを思い出して正直よかったと思った。

すぐに向かい、右から一つずつ調べていく、そして見つけて、ガンガンと鍵が開き続けるのをみて、開き終わったとき達成感を感じながらも、さっさと入る。

向かうのは4年生教室。
薄暗い廊下を歩くのは恐怖しかないが、廊下で今日一日のことを思い出す。

またあの二人喧嘩してたな、とか

それを止める俺の気持ちにもなってくれ、とか

そんなことを考えてみれば、すでに教室の目の前、嬉々として開けてみる。

…ガタツという音がして止められた。

開いたのはおそらく数ミリ

「…で、ですよね。」

閉まっているということ忘れてて、冷や汗を流して、どうしたものかと考えると、教室の内側でミシツという音がなる。

…誰がいるかもしれない！

そう思ったとき、教室の扉をドンドンツと叩く。

このさい用務員さんでもいいと思って叩いたのだが、次の瞬間だった。

扉が外れた。

「…は？」

声を上げられない、呆然とするしかない
なにこの状況？、そう思考が薄く言った。

これでも京都の伝統ある武家で生まれた…剣術はあまり教えられないけど、そんな生まれだ、稽古をつけてもらったことがある故に、瞬発的に後ろへ引いた。

が、次の瞬間異常な引力に引っ張られ

叫びを残しながら世界から俺は消えた。

そして目を覚ませば、少女。

銀髪の髪、空を思わせるほどの蒼い眼、きめ細やかな肌。
そんな、この世のものとは思えないほどの美しさをもった少女が目
の前にいる。

呆然としている俺を余所に、少女は俺に手を差し伸べていった。

勇者になつてくれませんか？

など。

その時の思考は言うまでもない、美しさに見とれて何も考えてない。
悪いかね？うん悪かったよ畜生。
思わずうなずいたのか、さっぱり覚えてないが

少女はパアツと顔を明るくして嬉しそうに笑った。

「やってくれますのね！」

そのまま、あれよあれよと剣を渡され、気が付けば城の門の前。

途中の人々の、がっかりしたような顔にちよつとおかしさを感じたけど、無理やり剣を渡され門の前へ置かれた。

いや、叩きだされたといったほうがいいのだろうか

そんなことで、俺は勇者として旅をしなければならなくなつたわけだ。

プロローグ（後書き）

うん、ネギまだね。

でもこれから一生ネギまは関係ないんだ。

この世界での2年はネギま世界での1年なんて設定つけてたんだよ？
で、書いとしてこれで満足したんだよ？

恥ずかしくて涙がでそうだ。

第一話『なにこの理不尽』（前書き）

30話終了を考えています。
なんていうか、ものすっごい最近文章を書くことになるとつらいんです。

昔はあんなに面白かったのに
だから思い出すために黒歴史引き出して書くことにしました。

とりあえず世界観

- 世界 -

地球ぐらいの星だが、大陸はたった二つ。

人間界と魔界

人間界は、巨大なエルベリアン湖という湖が中心にあり、ドーナツの形をとったあとに、ドーナツの円の線をかろくギザギザにした感じの大陸の形。

で、4つの国がある。

主人公の召喚されたのは『アーバンディア』

魔術師などを多く輩出。

お隣の『アーガンベルグ』

召喚士が多く輩出

『メデイスフィーレ』

剣士を輩出

『タルノベルグ』

戦関係はあまり強くないが、農業などの財政が強い国。

といった感じになっています。

- 魔法 -

魔法はプログラミングって感じで、文字の羅列を魔力によって作り出し、精霊に命令を送る、そんな感じ…です。

第一話『なにこの理不尽』

「え？なにこれ？」

放り出されて数分後、初めての言葉がそれだった。

自分に頷いた記憶はない、勇者になってくれといわれても呆然としかただけだ。

だけでも現実は無常なり、城をチラツとみていると、開けてくれるような気配はない。

むしろ門番から『さっさといけよ』な視線を送られて居心地が悪い。

仕方ない、そう思って腰を上げて歩き出す。

勇者…になるっていったんだよな俺？

それなのにこの扱ってのはなんなんだろう、なんて思いながら歩き出すと、ガラガラという音が耳に入る。

思考をとめて目の前を見ると、デカイ荷台をもった男が馬に荷台をひかせながらこちらにくるではないか、それを横へと避けることにして歩いていると、俺の目の前でその荷台は止まった。

「え？」

声を上げながら見上げてみると、男がこちらを見ている。

「おう坊ちゃん、こんな場所でどうしたんだ？」

…俺が聞きたいよ、そっくりそうになったが言葉を飲み込む。

とりあえず状況説明をした。

すごい同情の視線を送られた。

「ま、がんばれよ。」

そういつて傷薬とお金と食べ物くれた、いい人だ。
だが問題はそこではない、この同情する視線だ。

「なんでそんな目でみるの？」

そう聞いてみたが、言葉を濁すばかり、答えられないようなことなのだろうかと考えて、さすがに迷惑をかけられないと感じて礼だけ
いってさっさと歩いていくことにした。

その時の申し訳なさそうなおっちゃんの顔が忘れられない。

歩いていると、へんな動物がわいてくる。
RPGよろしくな魔物というやつだろう。
こちらに向かって襲いかかってくる、まあこれもRPGよろしくと
いった感じだ。

「どっせい！」

かつこ悪い掛け声とともに後ろへさがって魔物の攻撃をよけて、剣
を引き抜き突撃開始。
肉をたてばすぐに絶命した。

「…あ、やべ。」

これ木刀じゃなかったわ
そういつてちよっと吐いた。

さっさと歩いてみて、村がある。
門番は俺をチラッとみると、警戒心をなくして視線を戻していった。

子供がそんな大きな問題を起こすわけがないと思っているのだろう。

村にはいつてみて、とりあえずわかったこと

なにやっていいかわからない！

ちよつと悲しくなつて地に手と膝をついて頂垂れてみた。

そしてすぐに思いつく、ここはRPGを参考にしよう！と
そう考えてみてまず村にはいつたらやることを考えてみる。

・探索

・イベントを探す

・武器の買い替え

武器屋は…武器もらったばかりだし、結構業物だしこのままでもい

いと思う。

イベント？そんなもの現実的に考えてないだろ、いやあっても困るけど

そして消去法としてでてきたのは…探索。

ツボを掴んで…投げるッ！

家に上り込んでタンスを調べるッ！

宝箱を調べて…道具ゲット！

いや待てよコラ

「ないな。」

結局振出にもどった。

とりあえず犯罪にならない程度に話を聞いてみようと思い、歩きまわろうと思ったときに、目に入ってきたのは少女、一人ぼっちで悲しそうに腰かけている。
年は…俺より低いだろう。

まずはじめは彼女にしよう！そう思って声をかけてみる。

「こんにちは！」

「え…あ、こ、こんにちは。」

声をかければ、ちょっと驚いたようだがちゃんと声を返してくれた。

「1111でなにやってんの？」

そう言ってみれば、途端に悲しい顔をする。
今度はこっちの驚く番だ。

「え、いや、えっと別に答えたくないならいいけど…」

「天才とかいわれたの。大人みんながすごいっていうの。でもみんな、私を嫌いって、いうの…だからわだじっひとりっも…うまぼーなんがい…らない…っみ…ん…な…どあぞびだいつ…」

…地雷を踏んだらしい。

天才か、…魔法ねえ、非常識とかもうそんなこともうどうでもいいや、異世界っぽいし

魔法で天才とかいわれてもさっぱりわかりません。

とりあえず泣いている女の子に手を差し伸べる、これが男だって父さんいつてたし、手を差し伸べるか…

手を差し伸べてみる。

手を差し伸べ…てそのあとなにやればいいんだ？

一人ぼっち…一人ぼっちか、思い出してみれば、一人の女の子を思い出す。

おかしいおかしいっていつて、一人ぼっちになった女の子、一緒に遊べるようにするとき、なんていつただろう。

ああ、直球でいつたのか

「遊ぼうよ」

その声をかけてみれば、涙でぐちゃぐちゃになった顔を女の子はあげる。

「ほんとにつ…?」

聞き取りずらかったけど、強くうなずいた。

少女は、俺の手を取った。

第一話『なにこの理不尽』（後書き）

お、意外と面白くなってちょっと感じた。

いや、書くのがですよ？書くのが

ついでに一人ぼっちだったってのは…ネギまで考えればわかりますが…ってこれどうすりゃいいんだろう、原作者ネギまとか書いたほうがいいのか？

でもネギま書くつもりもうすでにさっぱりないんだけどっ

書いたほうがいいのか！？

意見ください！

第二話『なにこの巻き込まれ方』（前書き）

こんにちはです。

ちよっとタグに『元の世界はネギま』ってタグいれようと思います。
いや、能力とか使っても別に原作名いれなきゃいけないわけじゃない
いでしょ？ならいいんじゃないかって。

第二話『なにこの巻き込まれ方』

夕日がオレンジ色の世界を作り出す。

そんな時間帯になったときには、少女の泣き顔はどこへいったのやら、笑顔でバイバイをした。

あれ、俺絶賛家なき子じゃね？

そう思ってもすでに遅い、いや気づいても意味がないと思うけど。結局人の迷惑になることを良しとしない性格だから、家なき子だから泊めてっていうのはダメだ。

だからどうしよう？って思っ歩いてみると、水の音がしてそちらにいったみた。

川だ。

川の存在が希望にみえて、俺は服を脱いでダイブ。
つんめたあつ！？

速攻に外へ出てガチガチと歯をならす馬鹿一名が完成。

ちよつとずつ入ることにした。

ちよつとずつ入って…ふうと息を吐く。

上を向けば満天の星空

みたことなんてない世界が広がっていた。

『もう大気がよごれて、綺麗な星はみれなくなっています』

先生の声が脳内に響く、田舎ではみれると聞いていたが、それでも別の世界なんだなあと再認識できる光景だ。

「きれいだなあ…」

口に出して、ちよつとホームシックになった。

もらった食料をしてみる。

おそらくこれは…日持ちするための加工をしているのだろう。

腐るとかそういうものを見比べる眼力はない、未来が本気で心配になってきた。

ビンからとりだしてかじってみる。

食べたことのない味、でも嫌いじゃあない。

もう一個食べてみる、

うん、おいしい

でも母さんの料理のほうがおいしいかもしれない。

そういつてちょっと悲しくなった。…でもいつか帰れるかもしれないから、うじうじなんてしてられない。

前向きに生きるのが我が家の教訓らしいから。

食べ終わって、歯を磨こうと思うがどうしたものか。

歯ブラシなんてものはないし、あるのは水だけだ。

水を口に入れて、口の中で動かしてみる。

そして吐き出し…何度もやってみる。

…ある程度はスッキリした。

でも物足りなかったなので、指で洗ってみることにする。
指でやって、結構スッキリする。

「…ま、でも歯ブラシみたいなものがあつたら買おう」

どのくらいかはわからないけど、お金ももらったんだし。
そう思っって硬い石の上で眠ることにした。

魔物怖いけど、火をつけていけば大丈夫らしいし、火をつける道具も、もらったものの中にあったし

だから俺はそのまま寝ることにした。

次の日

体のところどころが痛かったが、起き上る。

んーっと伸びをしてみれば、ところどころがゴキゴキツという音を鳴らした。

顔を洗って、食べた後歯を洗って、村に戻る。

また少女にあった。

少女はあった瞬間にパアツと顔を輝かして、こちらに向かってくる。

「名前っ!」

そしてあった瞬間にいつてくる言葉は、名前を教えてくださいと言葉なのだろう。

…本名は『西崎にしわざ 通志トオシ』という名前だ。

「トオシだよ。」

「トオシ? 私アメリカ!」

そういつて元気よく俺の手を握る。
そして強く引っ張って俺を連れて行くこととする。

「お、おいどこにいくんのだ？」

「お母さんに紹介するの！」

お母さんに紹介？

恐ろしいくらいに不審者を見る目でみられそんな気がするんだけど。

だがなすすべもなく連れて行かれたわけだが。

そして目の前にいるのは、アメリカのお母さん、美人だ。

「どこから来たの？」

が、やはり最初だった。

トオシという名前の子供はこの村にいないらしい、まあアメリカから聞いて、横文字文化だとは理解できるし…珍しいだろう。

だからこそ仕方ないと思って俺の現状包み隠さず言い放ってみると、ものすごい同情された。

…なんか同情されすぎている気がする。

毎回毎回同情されるので、何故かと聞いてみれば、ちょっと渋い顔をされた。

お願いを繰り返せば、教えてくれた。

…それはそれは、異世界ファンタジーとかけ離れた言葉だった。

長かったからまとめてみると

- ・勇者は複数召喚されている
- ・それは魔王を倒すために
- ・倒すためにというのは真実だが、その裏では国の優位さというものを争っている

・召喚した勇者が魔王を倒せば、召喚した国が強い権利をもてる

そんなものだった。

異世界勇者ファンタジーとか、糞くらえなものだった。

「…現実的すぎるよ。」

そうボソリと試してみると、悲しそうな目でアメリカのお母さんはいった。

「いつしよに暮さないかい？」

…その言葉は俺にとって最高の言葉だったけど、ちよつと考えれば Yes といってしまつたらこの人たちが危ないことがわかる。権力を高めるための召喚だ、ここでとどまって、万一でも見つければ無理やりにも旅にいかせようとするだろう。そのときどういった手をするかなんて想像できない。でも、この家族があぶないかもしれない。

だからこそ

「俺はがんばることにします。」

決断した。

そうかい、ちょっと悲しそうな言葉が心に突き刺さるようだった。
いい人だな、なんて思っていれば、アメリカのお母さんは俺の肩を

たたく。

「一日ぐらいとまってきなよ！」

そういって元気よく笑ったアメリカのお母さんは、やっぱりきれいだった。

「え、泊まるの？やったあ！」

アメリカの元気な声。

ちよっと涙がでそうだった。

第三話『優しい人もいる』

次の日、村をでる。

「いつちやうの?」

悲しそうに両目に涙を浮かべて、アメリカがいつてくるけれど、俺は頷くしかない。

アメリカのお母さんから食料をもらい礼をいって外へと行く。

…できれば平和に生きたい。

でもさ、迷惑かけるわけにはいかないんだよね。

そもそも、魔王倒さなきゃ返してくれなさそうだし

「これって理不尽っていうんだよね?」

問いかけても、なにもかえって来やしなかった。

魔物が無限にいるような感じがする。

いや限りあるとかうそでしょ。

子供の手足というものが小さいからだろうか、次の国につくまでに二週間かかる。

食料もつきそうだというレベルだ。

その間に魔物はでてくるわでてくるわ

ゴキ…Gちゃんのように感じられる。

いや、あの黒光りする鎧のようなフォームとカサカサと俊足を誇るあの足じゃないからいいんだけ…あれなんかいつといてかつこよく思えてきた。

その間に剣を振り回したりと、父さんがいつてきた剣の戦いかたを思い出し、何度も頭の中で繰り返しながら剣を振る。

腕が太くなってきた。

木刀と真剣の重さというのはやっぱり違うんだね。

…できれば剣より刀がよかったと思う。

父さんに剣術もつと習ってればよかったと思った。

えっと、なんだっけ？父さんがいつてたの、きょーとしんなんとか…

まあいいか、後悔なんかしても手遅れだし。

いまは街が見えてきたのをうれしもう。

「西崎通志さんがログインしました。」

…意味はない。

門番が変なものをみるような目で見てくる。
ちよつと恥ずかしいが、まあそんなものどつでもいいや。

ある程度の魔物は倒せるし、ギルドっぽいものがあったらランクの
低いものを買ってお金を稼ごう。

門番にここについて聞いてみると、怪訝な顔をされたが、教えてく
れた。

国名『アーバンディア』

召喚された城の名前は『ベルティア』

その城の領地の中にあるこの街は『デリメーク』

お礼をいって、さっさとギルドっぽいものを探そう

そう思って街を歩くと、文字が読めなかったので聞いてみればやっ
とたどり着く。

ドアを開ければカランカランと甲高い音が響き渡る。

カウンターがあり、そこにいたのは女性。

こちらをみてちょっと驚いて、

「坊やがくるところじゃないのよ?」

と言ってきた。

坊や、というのは事実だが、別に弱いわけではないと自負している。
だからこそ状況説明。

勇者になり…ならされましたと、そういったところ同情された。

うん、いい加減つらくなってきたゾ！

「お金がないのですよ。」

そういつてみたらハアとため息をつく。

「でも、子供に仕事任せて死にでもしたらあまりいい気分じゃないのよね。」

そういつてクルツと後ろを振り向く。

「だから…クレシス。」

そして誰かはわからないが名前をいった。

そうすると、野太い声で返事が返ってくる。

そしてでてきたのは屈強な男。

「紹介するわ、私の夫クレシス。」

「…ジェフィー、この子は？」

そうクレシスといった男がジェフィー、おそらくこのお姉さんのことだろう、彼女に聞いてくる。

そうするとジェフィーさんは話をすると、クレシスは頭を抱えたが、すぐにニカツと笑ってきた。

「よし、戦い方を教えようじゃないか。」

そういつて屈強な体を見せつけるようなポーズをとる。

それは本当に 暑苦しかった。

「その間、私の仕事をたまに手伝ってくれればいいわ、三食寝床つき。」

そういつて笑うジェフィーさんはほんとうに女神にみえた。クレシスさんの強さに期待して、ジェフィーさんの優しさに満足した。

「さて、君の名前は？」

そういつてくるクレシスさんに

「トオシです！」

そう元気よくいった。

そうすればクレシスさんもわらっていうのだ。

「うん、いい響きの名前だ、じゃあやろうか！」

「はいっ！」

ジェフィーさんはその光景をみて、ほほえましく笑う。

俺は、このとき知らなかったんだ

俺がクレシスさんを倒すのに三日もかからなかったことを

そして…クレシスさんは三日後…体育座りで店の隅で泣いていることを

第四話『ハジメテの』

うじうじという言葉を自分で漏らして、店の隅っこで『の』の字を書いている男、その名もクレシス
はりきって鍛えてやるといいながら三日もたたずに負けた男、クレシス

はつきりいって邪魔である。

だがこの現状を打破しなければミッション、RPG的にクエストを受けるところまで進まないのではないか。
そう考えて、その方法を考えてみる。

うなれ10年の人生！

そんなことを考えていると、ジェフィーさんが近づいてくる。それをみていて、すぐに気付いた、夫婦である、助け合うというものだ。

ハッキリいって俺の夫婦関係というのはあまりよろしくない、がこの夫婦は別だ。

俺の考える…いや求める夫婦というものと勝手に考えている…勝手だけ。

うじうじと言葉を発するクレシスさんに、ジェフィーさんは肩に手を置いて、耳元で、だけど店に響くような透き通る声で、優しさを持って、女神がごとく

「三日だったね。」

「がふっ!?!」

ちょ、ちょっとジェフィーさあんと突っ込みをいれなくなった。まさに言葉の刃である、それを笑顔で、まるで日常が如く振りぬい

たジェフィーさんを思わず見る、…笑顔は女神のようだ。
だがそれがなんだか怖い。

「最後はボコボコだったね。」

「とべらあっ!」

血を吹き出し、地面に手と膝をついて動かなくなるクレシスさん、
そしていまだに女神のようなジェフィーさん。

「夜、私に『俺がアイツを育てる!』とかいったよね。」

「でいぶっ!」

そして追い打ち

さながら羽をもいで、飛べなくなった虫を踏みつぶすといった所業。
だがジェフィーさんは今度こそピクリとも動かないクレシスさんを、
ゆっくりと抱き寄せる。

「でも、そんなあなたが好きなのよ。」

「ジェファイイイ！」

漢泣き、その言葉がでるくらいの涙を流して、抱き合う夫婦。

ここまでをみるといい夫婦のだが、外からみよう

ジェファイさんの顔は『計画通り』と言っているようにしかみえなかった

その現実から目をそらし、一枚クエスト適当にとって受理を求めると、あっけなく受理される。

そのことには驚いたが、一つのマジックアイテム、というものを渡された。

どうやら使えばここに帰ってこれるらしい、便利だ。

楽しみ半分、緊張半分、そういった感じでいってみると、そこは山奥だった。

紙をちらりと見る

『山賊首領』

首領、ということは一歩偉い人なのだろう。

暗い山奥を歩けばすぐに目的の人物を見つける。

幸いにも一人、

「おう坊ちゃん、迷い込んだのかい？俺が帰り道を教えてあげようか？」

そうやってニヤニヤとしながらその人物は近づいてくる。

…おそらく迷子とでも思っているのだろう、背中に隠したナイフをちらりとみて、すぐに剣を引き抜く。

相手がそれをみて、先手必勝とばかりに飛びかかってくる、その攻

撃を横に飛んでかわしてみると、すぐに首領は横なぎへと変化する。それを伏せてかわし、そのまま近づき剣を一閃、血が宙を舞った。

それによつて、やっと実感というものがわいた。

これが殺し合いであるということ。

RPGみたいな、プログラムなんかではないということ。魔物は殺せた、でもこれは…人間、だ。

そのことで呆然としてみると、首領は狩る側だと思っていたが、思わぬ反撃を受けたことのせい、怒りに肩を震わせ、どこからか巨大な斧を持ち出してくる。

おそらく木の影に隠していたのだろう。

息を強くはいて、首領の一閃、それを横によけると、鈍い音がひびき、地震とも思えるほどの威力が地面を突き刺し、地面を揺らす。首領は引き抜く、が、すぐにこの武器の欠点を理解できた。

斧を再度振り上げると、前にいき、伏せる。

両手を使わねば振れない斧は、懐に入られたら動きにくい、振り上げるときに足をふんばるので、いきなり攻撃に転ずることはできない。

すぐに腕を土台にして上に飛ぶ。

そして、首へと突き刺す。

「……ッ!？」

その生々しさに思わず手を引いて抜いてしまう。

それで反撃にあってしまっただらヤバイ、そう思って首領をみると、首領はグラリと倒れ、地面を揺らした後にピクリとも動かない。

終わったあと、ぶわあっとではじめた汗をぬぐいながら、仲間の山賊が来る前にさっさと逃げなければ、そう思いふとマジックアイテムを思い出し、山賊の体をつかむと、使う。

気が付けば店の中、そして店の中と気づいた瞬間に思いっきり吐いた。

「トオシ、大丈夫トオシ」

「起きろ！」

二人の声が、遠く聞こえた。

第五話 『ベルホスさんと、魔法剣』

その日から11歳という年になるまでに、クエストを続け、お金がたまり始める。

その金額を数えて、軽く家計簿みたいなものを作り、計算、そして残りで本屋へと向かう。

11になるまでに、文字を覚えることを目標としたが、ままならぬいもので、覚えたのは半分程度、それだけでも十分すごいって言うるかもしれないけど、まだ足りない。

「…ふう」

ちよつと、俺疲れてきた。

ケフンツと小さく咳をして、埃っぽい本屋から本を買ってくる。

地図、そして文字の本。

旅の間に勉強すればいいか、なんて気楽に思ってた…いや、気楽じゃないんだな、これが

… ちょっとホームシックなだけだ。

ジェフィーさんとクレシスさんにお礼をいって国を出る。
悲しそうな顔をしないでほしいな、なんて思いながら、俺は歩き続けることを決めた。

今度から

長期滞在はやめよう

数日、歩きづめになって、到着する。

地図を確認、名前は『ベルティア』か、と確認して見上げる。
大きな城、はじめてではないのだけど、それでも幻想的と感じる。

さっさと入って食料を得て、滞在は三日くらいかな、なんて思って入った瞬間に

「おう坊主、身ぐるみおいていきな」

強盗っぽいものに出会った。
剣を抜く、剣先はブレない
まっすぐに相手を見据える、 - 慣れたものだ。

「… 来いよ」

精一杯の、声変わりがもうすぐ起こるであろう声を、低くして

「お前に、地獄つてもんをみせやるぜエエエ！」

逃走・開始

「へえあ？」

後ろでなにかいつてるが知らぬ、

「…おうう！？まてやコルアア！」

何か音がするが知らぬ！

そこから十数分、走り続けるが、まけない。
いやむしろ数が増えている気がする。

「おいおい、俺たちはこの国の人間だよ？逃げられると思ってんのか！」

土地勘というものだろうか、複雑に逃げているというのに、足の速さは負けないというのに、いつこつに視界からやつらがいなくなるということがあった。

どうする、考えてみて気づいた。

ひらひらと手がおいでおいでをしている、…畏かもしれない。

だが体力は有象無象にあるわけでもなく、駆け込むしか選択肢がないように感じられる。

だからこそ、駆け込めば、そこにいたのは青年。体つきは硬く、ゴツゴツとしているが、暑苦しいというわけではない。

筋肉を凝縮したような…そんな体をもった男だった。

「おお…あぶねえところだったなボウズ、この国やいまおかしいかな、だけどこの国を嫌わんでくれよ。」

ぜえぜえを息をきらす俺に対して、その青年はニカツと笑っていた。

「お、…おかしい？」

ゲフツゲフツと息を切らしながらもいつてみる。

青年をみれば神妙な顔つきをしていた。

「…ああ、ちよつといきなり王女さまが圧政をしきはじめてな…いやまあそんなことはいい、おめーみてえな子供がどうして旅なんかしてんだ。服装からすると旅人だろ？…おっと、すまん、俺の名前はベルホス、よろしくな。」

「あ、うん…トオシっていうんだ…ん、ああ、うん…えっと、なんていうか」

質問に答える、といっても簡単だ、勇者になれって召喚された。それだけ。

言い終われば、最悪だといった顔で青年は頭を抱えていた。

「なんだよそりゃ、子供に勇者になれって、それで剣を持たせてほつぱりだすたあ…よっしゃわかった！俺に剣術を教えてやる！」

…いや、うれしいことなのだが

「三日で俺」

「んじゃ、最終的に魔法剣を使えるようにしなきゃな。」

…魔法剣、ですとぉ？

魔法剣 それは男のロマンといえるものだろう。
剣に炎、氷、雷、光、闇等をまとわせて切りつける
数々のRPGゲームによくでる戦闘方法。

それにあこがれない男はいるものだろうか…

否アアアッ！

「よろしく願いしますッ！」

「…ん、おう！…あ、そーいやお前いまなんか言おうとしてなかったか？」

「いやまったく全然ッ！」

「ん、そうか、じゃあトオシ！それじゃあ使える魔法を教えてください！」

「…一個も使えませんか？」

「…あ、うん、まあ仕方ないよな。しかたねえ、一から教えるか、

魔法の本くらいはあるし、これ一度読んで基礎知識を

「文字すら微妙ですが？」

「…」

「…」

「…」

恐ろしく前途多難だと理解した。

登場人物紹介

主人公『トオシ（西崎通志）』

性別：男

年齢：（初期）10歳

性格：冷静に務めて積もり続け、心にためて地震で自身していくタイプ

剣術：『魔法剣』

能力：基礎剣術はできあがっているが、技などは一切知らない、この世界で魔法剣を覚える。

【装備】

武器：業物の剣

防具：白いYシャツとジーパン

魔術師『アメリカ』

性別：女

年齢：（初期）7歳

性格：苦勞するタイプ、信じた人には優しいが、信じられない人には魔法を発射する。

魔術：『オールラウンダー』

結局のところ天才すぎる天才

能力：いまのところ魔法に関しては大人顔負け、だけど戦闘経験無し

【装備】

武器：親からもらった杖

防具：ローブ

拳闘士『ベルホス』

性別：男

年齢：（初期）21歳

性格：人がいい、けどどひとたび怒り出すと子供だろうが殴る

拳術：『魔法拳』

能力：一撃で岩が吹き飛ぶレベル

【装備】

武器：素手

防具：鎖帷子

『ジェフィー』

性別：女

年齢：24歳

性格：さっぱりとした性格だけど心配性

『クレシス』

性別：男

年齢：27歳

性格：挫けやすいが、そこから這い上がるのは早い。

『姫』

性別：女

年齢：14歳

性格：純粹すぎて騙されやすい

備考：トオシが召喚されてあつた人。美人さん

第六話 『きつとこねってトラブル体質っていつんだよね』

剣を抜き放ち、横にする。

杖は指輪とし、指輪に思考を投影する。

文字が複数出てくる、それをゆっくりと操作する。

通常の魔法と魔法剣との違い

それは構成する魔法が円ではなく、線でできているのだ。
だからこそ普通の魔法とは違い、制御が難しいらしい。

息を吸い 吐く

カッ！と目を開き

魔法を構成する ツ！

「ハアアア！」

叫びながら炎の魔法を構成すれば、剣が青く光り、魔力に呼応するかのようにドクンと鳴った。

指先からでる文字の羅列を構成し、ゆっくりと剣に塗りつけるように剣に触れて指を動かしていく。

魔法剣、術式構成完了

火炎がほとばしり、剣を中心にして円を描くように轟轟と吹き荒れる火炎をみて、胸が高鳴る。

「うおおおおっ！ヒヤツハアアアアア！」

まるで『汚物は消毒だー！』みたいなことを続けていつかのような叫びをあげて、その場に転がる、ゴロゴロと転がって、疲れたので止まった。

「おつどぶるううう！」

「やかましいー！」

「痛いっ！？」

そして再度意味不明の叫びをあげれば、ベルホスさんがいい加減に

しろと言わんばかりに殴ってきた。

痛い、めちゃくちゃ痛い

見上げれば、ふうと息をはくベルホスさん

「いやまあ、上達すげえとはいえるけどよ、うん。でもおつぎぶるっていう叫びはなんなんだ？」

…特に意味はないです

「ま、上達が早くて結構なものだ。これで旅も楽になるだろうな。」

そういつて弟子の成長をうれしむように笑うベルホスさん、本当にいい人だと思う。

魔法剣というのは一般ゲームで使われるものでは威力というものはあまり見込めない、MPが多ければ使うといった感じだが、この世界でも魔法剣は威力が異常だ。

そもそも習得難易度というものが、魔法の10倍近く難しいらしい、いわれたときの絶望感というものは果てしなかった。

魔法剣とは、魔法を圧縮して打ち出すもので、威力は一点に集中する。

沢山の魔法があるが、強い魔法剣は『広範囲』かつ『威力が高い』という魔法から作り出すほうが強い。

「いや、本当につらかった。」

「…まあな、期間は相当短かったが、お前も俺と同じような道をたどっていたよ。」

最初は、魔法から始めたのだが、異常なほどに才能がなかったらしい、初期に覚えるはずの『ライト』という光をともし魔法だったのだが、それすらできない。

こりゃ無理じゃねえの？とベルホスさんが思ってきたのを感じ取ったので、無理やり魔法剣の魔法構成からしてみると、可能だった。

これで俺はベルホスさんから剣馬鹿という称号を受け取った

その後、それを剣に圧縮して憑依させることに集中して修行をするのだが、まるで針に糸を通すがごとく、魔法の構成の羅列を一つ一つ構成していった、失敗したら大爆発。

ベルホスさんが体自体には防御魔法をかけていてくれたから大けがにはならなかったが、衝撃は強く何度か気絶することとなった。

だが、できるのは早かった、最初にテンションあがって剣を振り回してたら、魔法を憑依させたままの剣は吹っ飛んでしまっただけ、ベルホスさんが必死の形相をして追いかけて行ったのはいい思い出だ。その後コツをつかんで、スムーズにやれるほどになった。

「本当につらかった…」

そういつて涙すれば、ベルホスさんは肩を叩く。

「お前は一人前とはいえないが、近づけるようにはなった。」

「うん。」

「お前は、心は強い、それは俺が絶対に証明する。」

「うん。」

「お前は 世界を救える。」

「うん！」

「お前に託すぜ俺の未来！」

「うんっ！」

そう大きく返事をすれば、頭に手を置かれ、ガシガシと強く撫でられる。

ちよっと痛かったけれど、父親みたいで

…ちよっととーさんに会いたくなった

トオシが寝静まった後に、寢床から抜け出す。
声が聞こえて、ふとトオシのほづをみると

「うひゃん…」

という寝言が聞こえて、ちょっと悲しくなった。

こいつはまだ11になった程度のカキだ。

それを召喚して、剣を渡して、なにもやらずに放り出す。

たしかに別の国はもうすでに召喚したときいたし、焦るのはわかる。だが、嫌になってくる。

どいつもこいつも利権ばかりで、人の心というものを忘れてやがる。

「かあ…さん。」

再びの寝言、…こいつが平和に暮らしたいってんなら、ここにおいてやるくらいはできる。

…だけどこいつはおそらくNoというだろう。

国からの圧力、そんなもの子供が感じるわけがないと思ってはいるけれど、数か月ともに暮らしてきてわかったことは、こいつの思考能力が大人びているということだ。

…元から大人びなきゃいけないことがあったのだろう。

…いや、大人びてなきゃここまでこれない。10歳だ、俺ならぴーぴー泣いている。

「ふう…つと、トイレトイレ」

ふと尿意を感じてトイレへと向かう。

すると、トイレの窓から見たのは…王妃

このベルティアの城にいる王妃だ。

「…なんでこんなところだ？」

不吉な空気が漂うことを感じて、思わずついていくことにする。

…王妃は歩き続け、国の外へとでていく、思わず止めようとしたが、王妃の足に躊躇はない。

目には生気がやどっていることから、魔物に操られていることもないだろう。

「おい、さつさとでてこい」

「…!?!」

ばれたか?と思ったが違ったらしい、王妃の前の茂みが揺れ…魔物!?!、人型の魔物が出てくる。

人型の魔物はニヤニヤとしながら王妃をみている。

「なにをニヤニヤしているんだ?」

「いやいや、人のまねが上手だと思ってな。」

…真似だと?

「…チツ、うるせえな、俺も人なんかに変装したくもねえよ、下等動物に成り下がりがりたくもねえ」

そういうと、王妃はバキバキという音をたてて、体を変形し…でてきたのは巨大な魔物。

魔法などを使って姿かたちを変えていたのだろう、醜いその姿に声をあげそうになるが、すぐに押しとどめる。

「だが…もうすぐこの国は手中にはいるだろう?」

「ああ、この国から嘘の情報を流し、国どもを疑心暗鬼にする作戦

は簡単にできそうだな。」

…疑心暗鬼に…国、そう考えれば、今の状況は容易に浮かぶ。
勇者、魔王…いわば競争状態、そこで勇者の行動が、競争相手である国に邪魔されているなどという情報が流れれば、争いが始まる。

「さて…報告は異常だな」

考えていたら話が終わっていたようだ、魔物は去っていき、王妃であつた魔物はすぐに王妃へと変貌し、帰っていく。

…飛び出したい気持ちがあつたが、足が動かない

魔物が完全にさつていったのを見て、やっと動くようになった足を見て、自分のふがいなさを感じる。

家へ帰り、トオシの顔を見る。

…こんな小さなやつでも、必死になって戦っているのに
そう思うと悲しくなるが、前へ歩けるように思える。

それは醜い感情だと理解しているけど、今は俺は歩かなければいけない。

拳を握る。

紙を引つ張り出し、書きなぐるのごとく書きだした

『ちょっと用事がある、お前の出国はみれないかもしれない』

ペンをすてて…走り出す。

第七話『たとえ無理やりでもいい、それでも』（前書き）

おそらくきつとたぶん…うん、きつとわかるよ、なこれまでのあらすじ

なんか勇者になった、少女にであって友達になった
クエストやった

魔法剣おぼえた、ベルホスさんたくらみ聞いて城へと特攻

第七話 『たとえ無理やりでもいい、それでも』

…紙をみる。

ベルホスさんが残した紙。

ちよつとがっかりしながらも、旅にでる身支度を整える。

剣を腰に、もらった本を袋へ、食料は大目

結構思いな、なんて思いながらストレッチをして、扉へと手をかける。

そうすればお隣さんのミーティアさんが立っていた。

「…どうかしました？」

もしかして見送り？なんて思ったが、旅立つ日は言っていないはず。面識はある、だがあるからこそ別れはきついから、勝手に消えようかな、なんてちよつと恥ずかしいことを考えていたからだ。ミーティアさんの顔をみれば、少し、心配そうだった。

「…うん、えつと…」

口を開けて、俺をみて、ミーティアさんは話を始めた。

城の方角へと歩いて行ったことを

城、言うまでもなくこの街にたっている城だ。

召喚された城よりは小さいが、大きな城、あまりいい噂を聞かないのだという。

そしてベルホスさんの表情

まるで決意したような、ものだったという。

…紙をみる。

『ちよつと用事がある、お前の出国はみれないかもしれない』

…今考えてみればおかしい、出国の日はつたえたはずだ
それも一週間以上前だった、だからこそ用事なんて終わらせるはず
なのだ。

「ッ…」

剣をいつでも抜ける角度にして、城をみる。
ここからでも十分にみえる。
そして、一歩歩く。

「あの、危ないよ?」

「危ない　?そうだね。」

おそらくこの人は、心配で誰かに聞いてほしかったのだろう。
だが聞いてもらった後に、冷静になって『危ない』といったのだ。
だが俺は見捨てる気など毛頭ない

「だって俺は…」

たとえ無理やりでもいい、それでも俺は

「勇者なんだから」

…ベルホスさんを助ける理由になってもらうぞ『勇者』

走り出す。

隠れながらも王の間へとついた。

王妃が余裕の表情で椅子に座る。

王の座には誰もいない、聞こえた話だと、体調不良とか、おそらく魔物が生气でも吸っているのだろう。

拳を握る。

圧政などといったものは、動けない王にかわって王妃がやっていることだったのだ。

王妃が偽物とわかった今…容赦するつもりはない。

「魔法拳

」

魔法拳と魔法拳はほぼ同じようなものだ。

剣が拳になっただけだし、自分の魔力だから炎を憑依させても痛くはない。

トオシに剣のほうを教えたのは、あいつが剣を使うといったことが理由だ。

王妃がいるところと俺がいるところをさえぎる壁をみる

拳を…振り上げる

「火炎ッ」

轟音

隠れていた壁を吹き飛ばす。

余波により数人が吹き飛ばす。

「なツなものだッ!？」

声を上げて、複数人が俺を囲むように陣をとる。

いきなりの轟音で混乱しているというのに、この速度、錬度の高さ
がうかがえる。

だがそれは関係ない

一定の距離とあけて様子見をする、それはたしかに正解だ。

ツッコむのは馬鹿がやることだし、遠くにいるのは何かあったとき
に対処できなくなる。

相手が行動すればすぐ切りかかれる、そんな距離にいることは最善
だろう

だが

「それはッ!」

両手で右・左と肩をつかみ、魔法を構築

『右に風を』

『左に炎を』

「俺には関係ないッ!」

魔法を憑依、そこから手と手を叩き、手に魔法を集める
気づき攻撃を仕掛ける兵士　だが遅い
魔法を収縮し…地面に叩きつける

『魔法拳・火炎烈風』

「がアアツツ!？」

「なアツ!？」

兵の叫び、おそらく焼かれる痛みによるものだろう
戦士としての生命はたたれないだろうし、入院する程度でもない
風の魔法で吹き飛んでもらい、王妃を睨みつける

「…こい醜い魔物が」

「…どこで知ったかはわからぬが…いいだろう下等生物がッ!」

ゴキゴキと音をたて　変化する

巨大な魔物

背後から、『魔物…だと?』『王妃が偽物だったのか!?』といっ
た声上がる。

「国を護るため　民を護るため…いやどーでもいーや。」

かっこいいことを言おうとしたが中断し、微笑してから

「気にくわねえ!」

簡潔的に今の気分をいって、走り出す

『魔法拳・雷』

右手に魔法を憑依
魔法拳を作り出す

「馬鹿がアツ！」

魔物から大量の触手が生える
全面から一気に向かってくる。

炎の魔法を構築させ、足に憑依する。
そして、地面に足を叩きつけ、爆発させ、そこから加速する

『魔法拳・吹雪』

左手に構築し、魔法拳を作る

左手の一撃で、目の前の触手は凍り、砕け散る。
そして、魔物の目の前へと降り立ち

「くらエエ！」

右手をつきだす、一撃により魔物は吹き飛び、そこからすぐに離れ、
くるくると回りながら降り立つ、…やったか？

そう思ってたっすぐ前をみると、苦しむような声をする魔物…いや
…おかしい。

声が、本当に苦しんでいるように聞こえない。

「なア〜んちやって、ゲラゲラゲラ」

そう魔物が笑うと、魔物が再生していく。

「治癒：いや再生か…」

「そオです、細胞が少しでも残っていれば再生しますウ」

嬉しそうに、余裕そうにゲラゲラと笑う。

： 広範囲の魔法で魔法拳を構築するかと考えてみる

いや、それだと無理だ

魔法拳により、威力を散らせば大打撃はつけるだろうが、消滅するほどではない

半分を消滅させるほどの威力はあるだろうが

「チツ…」

「ギャハハ、手詰まりってやつですか？ だったらさっさと死ねよ！」

触手の攻撃、それをよけ続ける。

魔法拳で破壊しても無意味だ、再生されるだけ

手を考えるために時間が必要だが、余分な魔力を消費して、思いついた手を使えなくなるのはダメだ。

「チィ、ちよこまかと！」

右

左

飛べ、触手をつかんで回避

屈んでよけ、バネをつかって前に飛び、右に転がりながら避ける。

考える、考える、考え…

「ベルホスさん！」

え

やっと到着する、場内は混乱しているので、無理やり押し通せばすぐに到着した

ベルホスさんが戦っている場所へと到着し、声をあげる

「ベルホスさん！」

何故いるんだ、といった表情。そりゃいるさ、俺は勇者だから…とは関係ないけど

巨大な魔物に圧倒されながらも近づき、剣を引き抜き触手を切り裂いた。

「切り裂いても疲れるだけだ！再生する！」

ベルホスさんの声で、触手をみれば、すぐに再生する。

「…つうか何故きた！」

「ミーティアさんがみてたんだよ！」

そういわれて、ベルホスさんが納得…してない。
ものすつごく不満そうな顔をしている。

「…俺が勇者だというこじつけできた！」

…しかたないと思って理由をいってみると、ポカんとベルホスさんは俺をみる、それでも避けていることはさすがだといえる。
そしてポカんと呆けた後に爆笑し始めた。

「あーもーいや！小難しいことは考えるのをやめる！さっさとぶつ潰すぞ！半分消滅させる！」

「半分！？無茶じゃないか！？」

「無茶じゃない、死ぬ気で魔力を使え！」

「ええ！？」

なんとという無茶ブリを言い渡されながらも、魔法式を構築する、…
炎の魔法式を構築。

だが足りない、知っている魔法のレベルじゃ半分も吹き飛ばすことは不可能だ

「うおおおおお！」

…後ろからの複数の声

そして何かが頭上を通り過ぎ…魔物へとぶち当たる

「…ありや…油かアア！」

嬉しそうにベルホスさんが言った後に、俺も笑う。
魔法式を憑依

「いつけエエエ！」

兵士の声

「魔法拳
」

「魔法剣
」

ベルホスさんと俺の声が重なり

「「火炎ッ！」」

油により、炎の広がりが巨大化する。

轟轟と炎がその猛威を振り回し 大きな火柱と化す。

最後に残ったのは、魔物の叫び

一瞬で燃え尽きた魔物は、声だけのこし…この世から消えた。

第八話『ヴァレール』（前書き）

やっと、やっとこれで基本方針の説明が開始する。

第八話『ヴァレール』

爆発音

そしてその後、煙がはれればあったのは、焦げた風通しのよすぎる部屋。

俺とベルホスさんが歓喜したのは当然のことであろう。

魔物を倒した後、兵士たちが近辺を探索すると、王妃が発見された。ポロポロになりながらも、気高くその女性は椅子に座る。カリスマ、というものだろうか：彼女は何かあるうとも動じないという雰囲気です。その場に座っていたという。兵が彼女のいる牢屋をみつけ、開けた時、彼女は表情を変えずにこういった。

「…やっとですか」

…この話を聞いたときに、これがカリスマなのか、と感じた。

そういつた王妃が目の前にいる。

「このたびはありがとうございます。さすが勇者…いえ、トオシ、
といたしましたね、…ありがとうございます。」

「いえ。」

王と王妃、王がガクガクブルブルしながら王妃の真横にいる。

「さて、夫である王が見破れなかった」

「げふうっ!」

血の吐くようなつめき声をあげる王、王妃は恐ろしいくらいに笑顔

「長年付き合わせたというのに」

「がはっ」

「もうこれっぽっちもわからなかった」

「げばっ」

「そんな魔物ですが。」

…王妃の言葉が槍となって王に突き刺さる幻想がみえた。
王が言葉が続くたびにダメージを受け続けている。

「倒してくれてありがとうございます」

「はい」

「お礼をしたいと思うのですが…よいでしょうか?いえ、もう渡さなければいけないのですけどね。」

「渡さなければ…いけない?」

そういうと、王妃はクスツと笑う。

そして兵士に視線をむけると、兵士たちは外へとでていった。

「剣…そのちよつとした業物程度の剣ではありません。勇者の剣にふさわしいといえる剣」

「…？」

「発端は首都にいる姫様の言葉でした。」

そついつて語り始めればでてくる言葉は啞然とするもの。
簡単にすれば…

姫『国々に勇者の剣とよべるほどのものを配って、そこにいるおじ様や叔母様にとめられたら渡すようにしましょう！』

…だった。

「…」

「…それにしても放り出すはないだろ…」

ベルホスさんの愚痴には同意しか起こらない。

そうして、言葉を続けていく王妃を見ると、後ろから音がする。

振り向けば兵士が剣をもつて入ってきた。

…そしてその剣を俺の目の前におく。

「名を『ヴァレール』、意味は『希望を切り開く聖なる剣』、特徴は…あなたの使う魔法剣と相性は最高でしょう。何せ『魔力を増幅させるのですから』」

「…最初は剣」

「ええ、最初は剣、次はどこでしょう」

…教える気はまったくないのだろう。とぼけるように言った言葉に苦笑しか起きない。

王妃をみれば、こちらをみてニツコリと笑う。

「魔王がせめて来たら集めてくれたりします?」

「集められない勇者が、魔王を倒せると思う人たちはいませんよ?」

…もう何も言えなくなった。

ずっと、にこりと笑う王妃に隣のベルホスさんは顔を盛大にひきつけている。

恐ろしいくらいに食えない人、おそらくベルホスさんの王妃への評価はこれだろう

剣を見る。

俺の体の半分程度の横幅、縦幅は俺の身長よりもある

握れはずっしりとしながらも、この大きさからは思えないほどに軽い。

兵から専用だろう鞘を渡され、それに閉まって、横にして腰につける。

…恐ろしいくらいに不恰好だ。

「…ま、大きくなれば十分になるでしょうね。」

…王妃様、それは『不恰好だ』と断言しているようなものです。ベルホスさん、今ブホオツとかいってふいたでしょう。

「…ありがとうございます。あと…どうやったら手に入れられるんですかね、この他って。」

「…認められればもらえるんじゃないでしょうか？」

「あ、ありがとうございます。」

渡す手順すらないそうだが、食えないといったようなことではなく、単純に『知らない』といった顔を王妃はした。

…姫様様、お美しいのは結構ですが、頭は大丈夫でしょうか？

「…もう、行きます。さっさといったほうがいいでしょうし、魔王とか怖いですし。」

そういつて礼をして身をひるがえすと、ベルホスさんも礼をしてついでくる。

そしてベルホスさんは数歩で足をとめると、王妃へと振り向いた。

「…貴方について聞きました。なにがあっても動じない、そんな王…じゃなくて王妃の国にいれてうれしいです。」

「ふおおっ!?!」

…王の精神的ダメージを受けた時の反応を聞きながら扉に手をかける。

「…希望とか、絶望とか、王にはありませんよ。ただ王たるものは…いつでも国を考え動くだけなのです。逃げる方法はない、なら待つ、ダメだったら、願うしかありません。それならば死んでも願いますよ。」

その言葉を聞いて、ちよつと胸がドキドキした。

第九話『勇者二人目』（前書き）

英雄アバンは剣を引き抜き、その身を白銀へと変わる勇者へと変えた。

引き抜いた彼の表情は平穩そのもの
湧き出す力、その違いにアバンはクスリとも笑わず、真顔で剣を強く握る。

「僕は弱かったんだな」

そういつて真摯なまなざしで自分の体へと装着された白銀に世界を照らす鎧をみる。

「だから、何度も負けた。」

鏡張りの世界、その世界で彼は、誰もわからないような敵と戦い、そして勝利した。

何度も負けたと彼は言う、だが仲間は笑う、彼の力をしる仲間たちはありえないと笑う。

彼が負けるはずがないと
だが彼は首を横に振って、言った。

「僕は心のどこかで思っていたんだ。死んだらどうしようって、勇敢な戦士なんていわれているけど、僕は死が怖かった。…それを突きつけられたんだ。見ただけでわかる死という存在　たまらなく恐ろしかった。…だけど…僕は受け入れられた。まあ…それでも怖いものは怖いけれど…」

そういつて初めてクスリと笑い　アバンは口を開く。

「僕は英雄になる、英雄…アバン、アバン・カルスフィオーレだ。」
そう言ってアバンは笑った。

『英雄アバンの冒険・鏡の世界の章』

第九話『勇者二人目』

さて、考えてみようか

そう、考えるんだ

ゲームにでてくる偉そうなキャラを

そんなのが目の前にいるわけだ

街をでて、街道がなくなるほどベルホスさんと歩く。

剣が不恰好なのでどうしたものか、というと、ベルホスさんが『剣を空間に収納する魔法』とやらがあるようで、それを提案。

だがその魔法はメデイスファイルにあるという。

剣士の多く輩出する国…だからこそそういった魔法の視野が広いんだな、なんて思って次の町をそれに指定しようとする、正反対にあるという

しかもいくためにはアーガンベルグという召喚士を輩出する場を抜けなければならぬ。

そしてベルホスさんは何かを思い出したように語りだした。アーガンベルグの英雄、アバンの物語。

鏡の世界、そう聞いて、誰が入っても何の変化もなく魔術師がはいっても魔力の気配はないから、もう力とかはないかもしれないし、なかったかもしれないけど、一応ゲン担ぎにいくという話になった。

そのときだった

馬に乗って四人ほどの人物が走ってきて、俺たちの目の前に止まる。

そして最初に戻る

「どきたまえ、僕は急いでるんだ。」

ウザったいといえる声、そして見下すような目つき。

そんな彼の言葉を無視し、ベルホスさんは横からすり抜けようとす
るが、剣を引き抜かれ、向けられる。

「僕は勇者だぞ。」

「だから?。」

「貴様ア、僕に命運がかかっているというのに偉そうだな、こんな

世界見捨ててもよいのだぞ?」

そういつてニヤニヤとして笑う青年をみて、ベルホスさんは冷めた目をむけて、俺の…え?ちょ、おま、持ち上げるなッ

「こいつも勇者ね。」

そういつて俺を持ち上げながら指す。

…あらま、勇者様の目が点だ…

「くはっ、ウハハハハハ!」

と、思ったら笑ってきた。

糞：地味に腹立つ。

「そんな子供が勇者だと?そんな子供に?」

そういつて笑う青年の後ろをちらりとみると、美人な三人。

笑い、しゃべる青年へと疲れたようなまなざしを向けている…あま
り好かれているわけではなさそうだ。

そんな青年にベルホスさんは、

「ぐわっはっは!」

わざとらしく笑い返した。…この人ぜえったいこの場を散々盛り上げて、あとはお前に任せるとか無茶ブリをしてきそうだ。

そんなわざとらしい笑い声が癪に障ったのだろうか?怒りで顔を真っ赤にして青年はベルホスさんをにらみつける。

「貴様ア…笑ったな!この勇者『アルバ・カーティクル』様を笑っ

たなッ！」

そういつて睨みつけてくるアルバといった青年を再度鼻で笑い、そして俺を…やめろっ、つかむな！
だが抵抗もむなしくさっさと掴まれ

「こいつのほうが強いよ？」

…あ、予感的中、絶対に俺任せだ。

そしてアルバよ、そんな簡単に挑発に乗るな、損害を被るのは俺だけだ

顔を真っ赤にさせてアルバは俺に剣先をむける。

そして叫ぶ

「剣を抜けッ！貴様なんぞ数秒でたたっ切つてやる！」

…めんどくさいことになった。

おいベルホスさん、いやベルホスウウウ、貴様はかつたなアア
ニヤニヤしてんじゃないよおおお！

「よっしやOKOK」

ベルホスを今から殴り倒してもいいんじゃないか？と思いつながらも手を収める。

そして何故か剣を引き抜いて構えることとなる。

「…」

もっている剣はヴァレール、魔法をさらに拡大される能力のある剣だ。

「はじめっ」

剣を引き抜き、魔法剣を発動

「『魔法剣・火炎』」

そして火をまとった剣で…で…で…！？

横をみる。剣：剣だ。巨大な火柱を立てている以外は剣だ。

「…」

「…は？」

アルバの唾然とした声、ベルホスも固まっている。
後ろの三人の女性たちもだ。

「ええつと、魔法剣」

「ちょ、おま、まで、それ…」

「火炎ツ！」

「いや、お願いべうっ!？」

轟音が響き渡り：あたり一帯が吹き飛んだであろう攻撃を受け、アルバの姿を見つければボロボロ、服装の防御力でも高かったのだから、だがもうピクリとも動かない。

「…勝ったな」

「恐ろしいくらいに不本意なくらいに剣の性能の勝利だ。」

ベルホスの言葉はよくわかる、だがうるさいよ

「剣も力だよ、RPGだって相応の剣がなきゃ魔王は倒せない。」

「RPGがなんだかさっぱりしらねえよ。だがこれだけはいえる。」

「え？何？」

「もうどうにでもなあれって感じた。」

…不本意ながら同意した。

「う…あ」

ベルホスさんと話している間に意識が戻ったのだろうか、アルバの
声が聞こえて駆け寄る。

「…大丈夫？」

「俺は…俺は」

負けたのか…？と続けるかと思えば泣き始める。
そして泣きながら

「あいつらと同じことをやっていたのか…っ」

そう言葉にした。

…さっぱりわからない故に、どう反応していいのやらわからない。
ポロポロになりながら起き上がると、アルバは俺へと近づき、手を握
る。

「…ありがとう」

…What?

「目が覚めた…」

そついつと彼はゆっくりと目をつぶり、気絶する。

…すがすがしい笑顔、何かつきものがとれたといったらいいのだろ
うか？それほどにすがすがしい笑顔で、気絶していき、気絶してな
おその笑顔は終わることはない。

…彼のいった言葉、意味はわからないけれど、彼が重いものを持っ
ていることだけは確かだと理解させられる。

だが、彼は今だけはいい笑顔だった。

満足そうな顔をみながら、ただトオシは思っ…

何言っただこいつ

と

第十話 『アルバ・カーティクル』

思い出す記憶は、殴られている記憶ばかりだった。

軍事の名門、『カーティクル』

その家に嫁いだ母は、血のつながらない父である『シルバ』の二人目の女だった。

…俺は、母のつれ子というもので、シルバの血はつながっていない。だからだろうか、シルバの目は、俺をさげすんでいる目だった。シルバの前の女の子供たちの俺をみる目もそれだった。

『何故貴様のような高貴な血をもたぬものがカーティクルの家名を語るか』

そういつて俺は食器を投げつけられ、殴られ、屈辱な言葉を吐きかけられる。

…優しいのは母だけだった。

そんな母も、優しくし続けければシルバの目にとまり、怒りの矛先を母に向けることもある。

だからがんばった

寝るのも惜しんで、剣を振ったし、勉強した。

だけど追いつけない

あの血のつながらない二人の兄に追いつけない。

剣術は一番上に負ける、だが頭は勝っている。

二番目の兄に頭は負ける、だが剣は勝てる。

だが二番目など一番に比べれば無意味だ。

だからこそ見直したという言葉もなく、屑がという言葉は大きくなるばかり

そして俺への暴力は、頭脳に負けた、剣術に負けた、兄たちも加わり激化していく。

母はそんな俺をかばい続けた。

…だから、母は日に日にやつれて行った。

…俺が、弱いから

…母は、死んだ。

シルバは、母が死んだとき俺をみて、言った。

「ゴミしか残さないのかアイツは、…まあゴミだから仕方ないな」

などと、死んだ相手に向かって、そういったのだ。

それに怒り、シルバの目の前へと一瞬で迫る、だがその隣にいた兄二人で抑え込まれる。

叫びながら抵抗すると、顔面を踏まれそのまま地面にたたきつけられる。

抵抗しようとするれば、頬を殴られる、腕を踏まれ、動けないそんな俺にあいつらは三人がかりで殴り続ける

ニヤニヤと笑うその顔が目について離れない

…いや、目について離れないようにした

絶対に殺す

絶対にあいつらを殺す

その偉そうにふんぞり返る椅子から引きずり落とし、屑という肩書だけのこし、屈辱に顔をゆがめるその顔を踏みつぶし、泣きながら懇願するその顔を容赦なく蹴りつけてやる
そう心に刻んだのは、9歳のことだった。

そう9歳、そこから10年もたつ

そして、何も変わってなどいなかった

そんなときだった、異世界に呼ばれたのは

勇者と言われ、俺は有頂天だった

なにをやってもいいという勘違いにさいなまれ、何も考えていなかった

自分より劣るやつを見下した、俺は偉いと思い込んだ。

そして旅にでる、3人の女をつれて、こき使ってやった

…そして出会ったのだ

子供の勇者に

馬鹿にするしかなかった

笑う笑う、こんな子供にこんな子供に何ができるのかと

…馬鹿にするしかなかった、そのまっすぐとした目に心をえぐられるような気分がした。

子供のころの自分にひどく重なった

いつか、いつか殺してやると、そんなことができると思っていた自分に！

だから、俺より強いと言われたときにムキになった

そして、負けた。

強かった、というより反則級だった、それでも敗北だった。

そして思い知らされた、子供に、子供でもできることがあるのだと

圧倒的な力だった

子供でも、そんな力を持てるのだと

俺は何をやった？心の中で無理かもしれないなどと心の奥で思っていた

だがアイツの目はまっすぐだった

…そして、理解できた。

そして、理解した

俺は、きつと屑だと言っていた兄のようなことをやっていたのだと

「…俺は」

言葉を紡ぐ

「俺は、あいつらと同じことをやっていたのかっ」

それが枷になっておもりとなることを感じる

それでもなお、起き上り、その少年の手を掴む

…ただお礼が良かった

きっとわかってなどいないのだろう、だが言いたかったんだ

「ありがとう」

目から涙が流れるのを、感じた。

第十一話 『勇者ッ！…勇者？』

「どろしてこうなった」

上に当然のごとく存在する蒼い空が恨めしい。

上をあげて、草原に背中を預ける。

横にいるはアルバといった青年

シーツをひいて、寝かせてある。

「ん…うあ」

すでに数時間はたっているだろうか、さすがに起きるよ、などと思
っている、起きてくる…いいタイミングだ。そちらのほうをみる
と、アルバは目をあけて蒼い空をみた。

「…空って蒼かったんだな」

なにいつてんだこいつ

そう思っていると、アルバは空をみたまま起き上る。

「…見る時間さえなかったよ、いや、見ようとしてもしてなかったんだ
な。必死になってやっていたし、必死になっても無理だと下を向い

ていたこともあった。この世界にきてからは見下すことばかりやっていた。だから上をみることから逃げていた。」

何かたつてんだこいつ

ベルホスさんも三人の女性も野宿の準備でどっかにいってしまったし、だれか突っ込み役をしてくれないかと思って周りを見回しても、風の音しか聞こえない。

「上がいるって、こんなに楽だったんだな。君は空といっしょだね。」

…意味がわからない
空？空と一緒に？おかあさんといっしょみたいな感じ？いやそれでもさっぱりだけど

「大きな存在がいるだけで、空を見上げるだけで、ひとは落ち着けるんだよね。」

ああうん、わからない。

「そんな君を僕は勇者だとみとめるけど…でも僕はあきらめないさ。」

…なんか認められたよ俺？

いや認められたのはうれしい…のかな？まあいいや

「僕も勇者だ。いや…俺も勇者だ」

言い直した意味がわからない

…でもなんかもうどうでもいいや

どうにでもなぐれ

「だけど…危ないときだったらいつだって呼んでくれ、いつだってかけつける。」

「いつだって？」

「そう、いつだってさ、君はわからないかもしれないけど、俺は君に助けられた。」

「助けられた？」

「うん」

…助けたのか、よくわからないけどよかったって思う。
すがすがしい顔をしていたし、最初視たといよりはいい感じの表情だ。

「んで、いつでもくるんだって？」

いきなりの声、驚いて後ろをみると、そこにいたのは大量の石をもったベルホスさんと、木々をもった三人娘。

「…いつから聞いていた？」

アルバが三人娘に問う。三人娘はニヤリと笑う。

「全部」

「…」

…聞いてたならツッコめよ、そう俺は叫びたくて仕方ないが、アルバの顔が羞恥心で真っ赤に燃やしているのをみて、そう言葉を発すれば空気読めない認定を押しなされるのでツッコみはしない。

…1年と半年くらいでどうしてここまでたくましく成長したのかわからない

「…なあ、ついてきてくれるか？」

「別にいいよ？」

「まあ姉さんがいうんだし」

「右に同じ」

「…そうか、ありがとうな。」

そういつてアルバは座ったまま下を向いた。

泣き始めたのだ、…展開が急すぎてついていけないのが普通だと思う

「さて」

ベルホスさんが空気読めない男と呼ばれない程度に隙について言葉を発する。

「いつでもきてくれるつつたけど、トオシ、いつ来てもらいたい？」

「は？」

「いやだからよ、伝達つたって結構時間が来るもんだし、勇者の動向っていうのは結構噂になるし、なんかが起こりそうっていうのは噂になるものじゃないか。勇者がなんとかに巻き込まれそうってのも結構話はでてくるわけよ。」

初めて聞いたが、それはそうかもしれないと思う。勇者はこの世の希望ながらも同情する相手のようなものになっているし、そういうものには注目が集まる。

人のうわさはものすごい距離を駆けるものだ、ほかの勇者の耳にはいるのも仕方ないかもしれない。

「…だからよ、どんなときにきてほしいっていったら、噂が入った瞬間にくるんじゃないか？」

…Oh、ベルホスさんが頭のいい人にみえる。

「…お前ちょっとひどいこと考えなかった？」

「いや全然。」

「…絶対に考えたら」

「何故バレた。」

「恐ろしくたくましくなってきたな、お前。子供の成長ってもんはそんなものなのか？」

いや、知らない。

そう答えて考えてみる。

いつ、いつねえ…そう考えて、今までのことを振り返ってみる

召喚される

ほっぼりだされる

村で女の子と仲良くなり、母親から権力争いの裏事情を教えられる

街へ行って、同情されるけど親しくなつてクエストをする

ベルホスさんの町で魔法剣をつかえるようになる、勇者倒す

…どうすればいいんだろう

そつも持つて権力争いについて考え、ニヤリと笑つ。

幾分俺もSの気があるのかもしれない

「決めた。」

息を吸つて、笑いそうになる顔を押しとどめて、いった

「魔王を倒すときにきてよ」

アルバの顔が引きつり、後ろの三人娘が固まる

そしてベルホスさんは、爆笑する、いうだろうって思っていたらしい

「ベルホスさんのにいえば、気に食わない、俺的にいえば、あれだ
…『勇者に権力争いは関係ない』…俺たちは魔王を倒すために呼ば
れたんでしょう？で、勇者はいつぱいだ。だったらさ、倒せばいい
じゃない、全員で。」

そう語ってみれば、アルバは顔をゆがませ…次に笑い始める。

三人娘はクスクスと笑い始め、ベルホスさんの笑いは止まらない

「そう…だね、関係ないな。」

「ま、私たちが権力争いに使われるのは気に食わなかったし」

「姉さんと同じ。」

「右に同じ。」

「…ねえ妹たち？全責任私になすりつけようとしてないかしら？」

「…姉さんが発案者で、私はとりあえず同じといたただけだとかい
えば逃れられるかと思ってないよ？」

「右に同じ。」

「…」

「…完璧に危険になったらなすりつけようとしている。」

「でも、RPGでは勇者は一人つてきまつてるけどね。」

「そんな三人娘をちらりとみて、アルバはそういった。」

「…返す言葉はきまつている。」

「なら英雄だ。俺は英雄になる、英雄…トオシ、西崎通志だ。」

「そういつて笑えば、アルバは首をふる。」

「いや、君は勇者だよ。いっついてなんだけどRPGとか関係ない。」

「笑って、」

「君は勇者だつ！…ま、英雄でもあるけど？」

そうだった。

第十一話『勇者ツ！…勇者？』（後書き）

沢山勇者がいる？だったら仲間にしちやえばいいじゃない
オオッホッホッホオ、あ、気持ち悪い？ごめんなさい

ちょっとあれだよ、作者の精神的な意味で適当にすませてたら3
0話終了なのに長引きそうだよ

プロローグ〜4話『ベルホス仲間入り』

5、6で勇者仲間にする計画

7 10話

12話までに

15話で 開始

18話で

21話で、

25話で、

29、30話で…

で終了だったんだよね

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8494t/>

勇者ッ！...勇者？

2011年6月27日16時10分発行